

外国語専攻教育におけるキャリア支援のための ビデオ教材の制作と活用*

— 韓日の大学教育での実践 —

松崎真日**・磯野英治***・検校裕朗****

matsuzaki@kwansei.ac.jp ・ hisono@nucba.ac.jp ・ kenko26@gmail.com

<要旨>

本 연구에서는 한일 상대 언어전공 학생의 커리어 지원에 특화된 교육용 비디오 교재 “영상으로 배우는 커리어—한일 학생이 전공 언어를 살리기 위해서—”의 수업 실천에 대해서 보고하고, 외국어 전공 교육에서의 커리어 교육의 실시 가능성을 찾는 데에 목적을 둔다. 한국과 일본은 정치와 문화에 있어서 교류의 역사가 깊고, 한국에서 일본어 및 일본 문화를 배우는 학생, 일본에서 한국어 및 한국 문화를 배우는 학생도 옛날부터 많다. 그러나 이 학생들이 졸업 후에도 활약하기 위한 체계적인 커리어 지원이 확립되어 있지 않다. 그로 인하여 이 학생들이 스스로 노력해서 진로를 개척해야 하는 상황에 처해 있다. 여기에 한일 언어전공 학생의 커리어 지원 상의 과제가 있다고 판단하여 지금까지 마쓰자키·이소노·켄코(2019, 2020, 2021a, b, 2022, 2023a, b)에서는 학부에서의 전문교육에 커리어 지원을 도입하기 위한 실태 조사, 교육용 비디오 교재의 제작 및 공개 등을 해 왔다.

이어서 본고에서는 이 비디오 교재의 수업 실천에 대해서 다루었다. 세 명의 연구자가 성격을 달리하는 세 개 학교의 교실에서 일본어 또는 한국어를 전공하는 학생을 대상으로 제작한 커리어 교육용 비디오 교재를 사용하여 수업을 실천하였으며, 수업 실천 전과 수업 실천 후에 설문조사를 실시하였다. 그 결과를 분석한 결과, 모든 수업에서 학생들이 커리어에 대한 의식이 향상되었음을 지적할 수 있었다. 이 결과는 외국어를 전공하는 학생들에 대한 전공교육과 연계된 커리어 지원 교육의 실시 가능성을 시사하는 결과라고 할 수 있다.

주제어: 커리어 지원, 비디오 교재, 수업 실천, 수강 전후의 반응

* 本研究は2019年度—2023年度科学研究費基盤研究(C)研究課題番号19K02875(研究代表者:松崎真日)の助成を受けて行われたものである。

** 関西学院大学 経済学部 教授、韓国語教育学(第1著者)

*** 名古屋商科大学 国際学部 教授、日本語教育学(交信著者)

**** 極東大学校 グローバル文化コンテンツ学科 教授、日本語教育学(交信著者)

1. はじめに

韓国と日本は隣り合っており、人的交流はもちろんのこと、互いの言語を学んでいる人も多い。そのため、韓国での日本語教育、また日本での韓国語教育は質・量ともに充実しており、とりわけ、専門人材を養成する専攻としての教育は、他の国々に比べても特に盛んであるといえる。このように大学等の専攻教育において高いレベルの教育が提供されている一方で、これらの人材が有意義に活躍するための政策や大学における体系的な進路支援は確立されているとは言い難い。専攻教育であってもキャリアに関する科目や教育内容は大変限られているという現状が指摘できる。学習成果をキャリア支援といかに結びつけるかは、学びの成果の生かし方に関わることであり、これを学生の自助努力に全面的に委ねてしまうことは、専門人材の養成機関として、出口の部分での教育が十分ではないことを意味する。筆者らはここに教育上の課題が存在するという認識のもと、その解決に向けて「日韓で学ぶ韓国語専攻・日本語専攻の学生が両地域の架け橋となるためのキャリア支援」を枠組みとし、①その実態を明らかにした上で、②モデルとなるカリキュラムとビデオ教材を開発し、③誰にでも活用可能な形で公開することで、日韓における人材活用の可能性を広げるとともに、専攻を生かしたキャリア選択の幅を広げることを目指している。これまで①に関しては、日本の韓国語専攻の日本人学生、そして韓国の日本語専攻の韓国人学生が就職活動に対してどのような認識を持っているかについての実態とその問題点を明らかにし(松崎・磯野・検校2019,2020)、②に関して、当該学生を対象に、どのようなキャリア支援を充実させていくことが求められるのかという点について、キャリア教育や学生の現状の問題点とこれらを解決するための教材制作を取り上げ、理論研究、および教材の制作と公開を行ってきた(松崎・磯野・検校2021a,b,2022,2023a,b)。

本稿では、キャリア支援用ビデオ教材の教室での活用に焦点を当てる。具体的には、本ビデオ教材を授業で視聴した学生の反応と変化について報告するとともに、その変化について分析と考察を行い、専攻として日本語、韓国語を学んでいる学生に対する本ビデオ教材の活用について検討を行う。これらの検討を通じ、今後の学生支援のためのカリキュラム作成、およびビデオ教材の活用に向けた示唆を得たい。

2. 先行研究

近年、高等教育機関においては「自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだし

ていく連なりや積み重ね」(中央教育審議会(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」)に対する支援・教育として、「キャリア支援」や「キャリア教育」の重要性が注目されてはいるが、薬学や看護学、教員養成課程など、資格取得を目標とする一部の専攻を除けば、専攻教育における「キャリア教育」や「キャリア支援」に関する議論は極めて少ない。これは専攻言語教育においても同様で、ビジネス日本語のような目的別言語教育としての議論はなされるが、キャリア支援やキャリア教育との接続・融合は殆ど行われていないといえる。また、日本においては『外国語学習のめやす』(国際文化フォーラム 2013)が開発され、言語教育の中で人々や社会との「つながり」を意識した外国語教育に対する理解は深まってきているが、授業づくりの方向からのアプローチであり、キャリア支援やキャリア教育とは観点を異にするといえよう。これまでのところ、専攻の学生の就職や進路の実態調査、キャリア支援に関する分析や方法についての議論は大変少ないといえる。以上の現況に対して、本研究は日韓を対象としている点で萌芽的、かつ国際的な研究であり、研究成果の波及効果と汎用性を考慮した結果、ビデオ教材を開発し、公開することが最適であるという主旨のもとで本研究は行われている。

3. ビデオ教材の紹介

ビデオ教材の授業での実践事例を提示する前に、前提となるビデオ教材『映像で学ぶキャリア－日韓の学生が専攻言語を生かすために－』について、要点を簡潔に紹介することとする²⁾。

本ビデオ教材は、専攻として日本語などを学ぶ大学生の視野を広げるための副教材または自律学習用教材として制作がなされた。全体で 26 分ほどの映像となっており、4 つのパートから構成されている。第 1 パートでは教材の目的の提示を行い、第 2 パートでは日韓のビジネスの現況と BtoB、BtoC といった概念の提示を行っている。第 3 パートは日韓の仕事の現場で活躍している社会人に対するインタビューである。日本で働く社会人として、韓国系製鉄会社の営業担当の社会人と、韓国求人求職者向けのコンサルティング会

1) 本研究課題の嚆矢となる研究は、外国人が韓国において仕事をするために必要な試験(EPS-TOPIK)の実証的分析(吹原・松崎・助川(2015,2016,2018)や日本語学習者が実際の社会において必要な日本語を習得できるような教材・検定の開発(磯野・西郡2017)がある。また本研究チームの行った研究として、大学生の就職意識を扱った研究(松崎・磯野・檢校2020)がある。

2) 本ビデオ教材の全体については松崎 松崎・磯野・檢校(2022)で報告しているので参照のこと。

社の営業担当者をインタビューし、韓国で働く社会人として、日系玩具会社の渉外・営業担当者に対しインタビューを行った。インタビュー内容を通じて専攻言語を生かした仕事のイメージが持てるよう構成してある。最後の第4パートは本教材の内容をまとめ、エンディングとしている。

以上のように、本ビデオ教材は専攻として言語を学ぶ大学生のキャリア支援に焦点を当てたものであり、言語教育の分野では先駆的な試みとして、YouTube で無償公開を行っている。

<表1> ビデオ教材の概要

タイトル	映像で学ぶキャリア －日韓の学生が専攻言語を生かすために－
公開年月	2022年12月
制作時期	2020年12月～2022年9月
構成	第1パート オープニング 第2パート ビジネスの形態 第3パート 日韓の仕事の現場 第4パート エンディング
再生時間	26分13秒
公開媒体	You Tubeでの無償公開 (https://www.youtube.com/watch?v=AfxzYVIC4Fs)



[図1] 第2パート「ビジネスの形態」



[図2] 第3パート「日韓の仕事の現場」

4. 実践報告

4.1. 授業実践の枠組み

ここでは、ビデオ教材『映像で学ぶキャリア－日韓の学生が専攻言語を生かすために－

』を実際に授業で活用した授業実践例を報告、検討する。本稿では、2023年度に韓国の大学で行われた日本語専攻の授業、日本で行われた韓国語専攻の授業、および日本で行われた日本語の授業(外国人留学生)の三つの実践を提示するが、まず授業実践の枠組みとして、授業が行われた国、科目名、授業の目的、受講生の属性やレベルは以下の通りである³⁾。

<表2> 授業実践の枠組み①

国	科目名	授業の目的	受講生の属性
韓国	「コミュニケーション日本語3」、「日本語技能総合研究1」	「コミュニケーション日本語3」は上級レベルの日本語を学ぶ授業であり、3年次に履修。また、「日本語技能総合研究1」は日本語の諸問題について総合的に議論する授業であり、4年次に履修。いずれも日本語専攻学生向けの授業である。	3年生7名(「コミュニケーション日本語3」)・4年生9名(「日本語技能総合研究1」)の計16名 *いずれも韓国語を母語とする

<表3> 授業実践の枠組み②

国	科目名	授業の目的	受講生の属性
日本	「朝鮮語入門B」、「朝鮮語ⅡB」、「韓国学演習Ⅰ・ⅡB」	「朝鮮語入門B」は韓国語の基礎を、「朝鮮語ⅡB」は中級レベルの韓国語を学ぶ授業である。また「韓国学演習Ⅰ・ⅡB」は韓国語の諸問題について議論する授業であり、いずれも韓国語専攻学生向けの授業である。	1年生31名(「朝鮮語入門」)、2年生19名(「朝鮮語ⅡB」)、3年生7名・4年生7名(「韓国学演習Ⅰ・ⅡB」)の計64名 *いずれも日本語を母語とする

<表4> 授業実践の枠組み③

国	科目名	授業の目的	受講生の属性
日本	「ビジネス日本語」 ⁴⁾	日本で就職する学部留学生のための科目であり原則として3年次に履修	韓国人留学生5名、中国人留学生9名の計14名、全員3年生

3) 本授業実践は3名の研究者がそれぞれ実践した結果を報告するものである。対象となる学生の属性は1年生から4年生、また日本で学ぶ学生、韓国で学ぶ学生、日本で学ぶ留学生である。本研究では特定の学年における効果を議論しようとするのではなく、様々な学生が学んでいる大学の日本語専攻及び韓国語専攻において、本ビデオ教材の活用可能性について論じるものである。そのため、本稿においては特定の学年や特定の属性を持つ学生に焦点を当ててのではなく、全体としての傾向を確認することとする。

4) 本科目は2023年度に文部科学省に採択され、名古屋商科大学で実施されている留学生就職促進教育プログラムの一環である。詳しくは<https://www.nucba.ac.jp/CDPforIS/#prettyPhoto>を参照のこと。

4.2. 授業実践前後に実施したアンケート調査の結果

それぞれA大学、B大学、C大学での三つの授業実践は、フェイスシートによる受講生のバックグラウンドの情報収集、ビデオ視聴前の学生の就職に関する意識や知識、状況を明らかにする事前アンケート調査、ビデオの視聴、ビデオ視聴後の学生の目的意識の変化や向上、知識の増加に関する事後アンケート調査の手順で授業を進行した。ここでは、ビデオ視聴の事前・事後で受講生たちに全体的にどのような傾向があったのかについて、アンケート調査の結果を一覧で示す⁵⁾。

<表5> ビデオ視聴の事前調査の結果①(韓国・韓国入学生)

a. 卒業後の就職について	3.56(5:1名、4:8名、3:6名、2:1名)
b-1. 将来の仕事について業界や業種	3.81(5:4名、4:6名、3:5名、2:1名)
b-2. 将来の仕事について待遇	3.75(5:5名、4:2名、3:9名)
b-3. 将来の仕事について福利厚生	3.81(5:7名、4:1名、3:6名、2:2名)
b-4. 将来の仕事について地域や国	3.62(5:4名、4:4名、3:7名、1:1名)
c. B to BとB to Cに関する知識	知っている2名／知らない14名

<表6> ビデオ視聴の事前調査の結果②(日本・日本人学生)

a. 卒業後の就職について	3.38(5:9名、4:27名、3:11名、2:13名、1:4名)
b-1. 将来の仕事について業界や業種	3.41(5:10名、4:31名、3:5名、2:11名、1:7名)
b-2. 将来の仕事について待遇	3.45(5:10名、4:28名、3:11名、2:11名、1:4名)
b-3. 将来の仕事について福利厚生	3.51(5:14名、4:25名、3:10名、2:10名、1:5名)
b-4. 将来の仕事について地域や国	3.48(5:10名、4:31名、3:6名、2:14名、1:3名)
c. B to BとB to Cに関する知識	知っている16名／知らない48名

<表7> ビデオ視聴の事前調査の結果③(日本・留学生)

a. 卒業後の就職について	3.5(5:2名、4:5名、3:5名、2:2名)
b-1. 将来の仕事について業界や業種	3.78(5:5名、4:5名、3:1名、2:2名、1:1名)
b-2. 将来の仕事について待遇	3.71(5:2名、4:7名、3:4名、2:1名)
b-3. 将来の仕事について福利厚生	3.71(5:2名、4:7名、3:4名、2:1名)
b-4. 将来の仕事について地域や国	3.64(5:3名、4:5名、3:4名、2:2名)
c. B to BとB to Cに関する知識	知っている12名／知らない2名

5) 表の右列の数字は受講生の平均を表すものであり、五段階評価法で5が「とても意識している」「とてもあった」「とても高まった」「よく理解できた」といったとても高いことを示すスケールになっている。

<表8> ビデオ視聴の事後調査の結果①(韓国・韓国学生)

a.ビデオ視聴の有益な点	4.00(5:5名、4:6名、3:5名)
b.卒業後の就職への意識	3.94(5:4名、4:7名、3:5名)
c.将来の仕事(業界や業種)への意識	3.69(5:5名、4:3名、3:6名、2:2名)
d. B to BとB to Cに関する理解度	4.25(5:7名、4:6名、3:3名)
e. フォローアップアンケートにおける学生の自由記述・コメント	
<p>・日本と関連した職業は翻訳家やガイド通訳士が全てだと思っていたが、今回の映像を通じてとても多様な分野でも日本語と韓国語が求められ、それらを活用できる人材を望んでいることが分かった。</p> <p>・BtoB, BtoCについて用語と意味がわかった。インタビュー映像で未知の職業がわかった。日本語または日本と関連した職業がとても多いことが分かり色々な職業とそれに対するどの程度の能力が必要なのか分かった。グローバル就職市場は相対的に難しいだろうという先入観があったのだが、映像視聴後、国内企業だけでなく日本就職やグローバル就職に対する第一歩を踏み出す勇気が生まれた。</p> <p>・本人は映像を見る前まで韓国語や日本語は果たして役に立たないのだろうか? とよく考えたりした。実際、韓日関係が悪かった時に周りの人から「日本語は役に立たない」とよく言われたし、日本語を勉強する時間に「英語や中国語を勉強しろ」と言われた。しかし、映像を見た後、多くの分野で韓日交流が行われ、単に物品を売るのではなくビジネス対ビジネス目的で企業間の貿易でも大きく必要だということが分かった。また、韓日交流活動を推進し、民間人の交流を推進する企業も多い。つまり日本語や韓国語は絶対に役に立たない言語ではなく、私の一つの強みとして作用できる手段だということを感じるようになった。</p> <p>・日本に関する知識だけではなく、韓国の知識も知っておかなければならない。マーケティング会社に関するマーケティング能力を日本語でも持ち、多様な感情に共感し、これに対する考えや感じたことを日本語で伝達し、専攻で学んだ能力を十分に活用することの大切さを感じた。</p>	

<表9> ビデオ視聴の事後調査の結果②(日本・日本人学生)

a.ビデオ視聴の有益な点	4.39(5:31名、4:27名、3:6名)
b.卒業後の就職への意識	4.19(5:16名、4:44名、3:4名)
c.将来の仕事(業界や業種)への意識	4.28(5:25名、4:32名、3:7名)
d. B to BとB to Cに関する理解度	4.64(5:43名、4:19名、3:2名)
e. フォローアップアンケートにおける学生の自由記述・コメント	
<p>・韓国語を使った仕事はサービス業しか思いつかなかったけど、色々な仕事で使えるんだなと思った。</p> <p>・韓国語を使う職業というとBtoCの職業しか出てこなかったが、BtoBという部類があることを知った。そのため就職活動の際に、視野に入れる職業の数がとても増えたように感じた。例えば、動画内に韓国本社の鉄の会社が出てきたが、見る前の私だと鉄鋼業の会社など視野に入っておらず、職業検索なんかでも外して試していたので、この動画をきっかけに選択の幅が広がったように感じた。</p> <p>・韓国に関する知識だけではなく、日本の知識も知っておかなければならないと知れてよかったです。</p> <p>・どの回答者の方も、自分の学んだ分野がどのように生きているか、会社で何が必要とされているかを客観視できていて、この視点を自分にも当てはめられるようになると思いました。</p>	

6) アンケート用紙に記載のママである。動画内で紹介されたインタビューーのことである。

<表10> ビデオ視聴の事後調査の結果③(日本・留学生)

a.ビデオ視聴の有益な点	3.78(5:3名、4:6名、3:4名、2:1名)
b.卒業後の就職への意識	3.78(5:2名、4:7名、3:5名)
c.将来の仕事(業界や業種)への意識	3.85(5:2名、4:8名、3:4名)
d. B to BとB to Cに関する理解度	4.28(5:6名、4:6名、3:2名)
e. フォローアップアンケートにおける学生の自由記述・コメント	
<ul style="list-style-type: none"> ・日本で就職したいという気分がとて高くなったと思います ・BtoBの企業にも優良企業が多いことに気づいた。 ・BtoBとBtoCの意味の詳しい説明があったので、理解できた。 ・就職について、まだ遠いと安逸に思っていました、早く自分なりのやりたいことを見つけなければならぬと思うようになりました。 	

4.3. 考察

以上、授業実践における事前調査と事後調査の結果を報告してきた。以下、各授業実践の結果を踏まえた個別の考察を行う。

韓国の大学で日本語を学ぶ大学生を対象にした授業実践においては、前提として、全学向けのキャリア支援プログラムはあるものの学生の自助努力に任せられており、本実践を行った科目もキャリア支援のための授業ではない。

表 5、および表 8 の履修者については、韓国の就職難の状況から、学生達の就職への意識は高い方であるが、あまり多くの知識を有している環境にはない。そのことは、B to B と B to C に関する知識を持ち合わせていない学生が 16 名の内、14 名と大多数であったことから窺える。

事後調査の結果に関しては、概ねポジティブであったといえる。特に、「ビデオ視聴の有益な点」、「B to B と B to C に関する理解度」の項目に関しては、5 段階評価法で平均値が 4 を超える比較的高い結果となった。学生達にとってはモチベーションの維持やさらなる向上、また既存の知識についての整理、再確認の機会はもちろん、新しい気づきの一助となっている部分のあることも数値から窺うことができる結果となった。事後調査では、五段階評価の調査の他にビデオ視聴において有意義な点があった学生に対して「もしあったとしたら、どのようなことですか、また、自身の就職について考えや計画が変わった場合も併せて書いてください」という自由記述欄を設け、記入してもらっている。本実践の事後調査の自由記述においては、表 8 の e のように、「とても多様な分野でも日本語と韓国語が求められ、それらを活用できる人材を望んでいることが分かった。」、「日本語または日

本と関連した職業がとても多いことが分かり色々な職業とそれに対するどの程度の能力が必要なのか分かった。」「映像視聴後、国内企業だけでなく日本就職やグローバル就職に対する第一歩を踏み出す勇気が生まれた。」のように、進路選択の可能性の広がりを認識したことを示す記述がみられた。また、「つまり日本語や韓国語は絶対に役に立たない言語ではなく、私の一つの強みとして作用できる手段だということを感じるようになった。」「日本に関する知識だけではなく、韓国の知識も知っておかなければならない。マーケティング会社に関するマーケティング能力を日本語でも持ち、多様な感情に共感し、これに対する考えや感じたことを日本語で伝達し、専攻で学んだ能力を十分に活用することの大切さを感じた。」といった記述は、キャリア形成に向けて日本語や日本地域に加えて、韓国語や韓国文化に関する知識の価値についての再認識を示しており、当該学生のキャリア意識が深まっていることを窺わせる記述といえるだろう。このように本教材を通じて、視野の広がりやキャリア意識の深まりにおいて、肯定的な学びがあったことがわかり、本教材が日本語専攻学生にとって有意義であることがわかる。

次に、日本の大学で韓国語を学ぶ大学生を対象とした授業実践について、表 6 および表 9 を見てみたい。事前調査における 5 つの質問(a, b1~b4)においては、5 段階評価法の平均値で 3.41~3.51 であり、平均的には多少の意識が見て取れるといった程度であった。また、「B to B」に関して尋ねた設問 c では知らない者(48 名)が知っている者(16 名)の 3 倍に達した。これに対し、ビデオ教材視聴後の事後調査では、3 つの設問(b,c,d)の回答の平均値は 4.19 から 4.64 の範囲に分布した。これは、事前調査に比べ、就職に関する意識の高まりが示唆される結果といえる。この結果は、受講した学生たちが、学科専門科目の中にキャリアに関する科目が存在しないことから、専攻に沿ったキャリアに関する学びが初めてであったことが要因となっていると思われる。つまり、本ビデオ教材で提供された内容は学生にとって新たな知見であったと思われ、それが事前調査に比べ事後調査において平均値が大きく上昇した理由になっていると推察される。本実践の事後調査の自由記述においては、表 9 の e のように、「サービス業しか思いつかなかったけど、色々な仕事で使えるんだなと思った」、「就職活動の際に、視野に入れる職業の数がとても増えたように感じた」のように、進路選択の可能性の広がりを自覚したことを示す記述がみられた。また、「韓国に関する知識だけではなく、日本の知識も知っておかなければならないと知れてよかった」、「自分の学んだ分野がどのように生きているか、会社で何が必要とされているかを客観視できていて、この視点を自分にも当てはめられるようになりたい」といった記述は、キャリアの形成に向けて専攻言語や地域に加えて、自らの母語や文

化に関する知識の価値についての認識の深まりや、自分の能力の生かし方や社会での役割を把握することの重要性の認識の深まりを示している。当該学生のキャリア意識が深まっていることをうかがわせる記述といえるだろう。このように本教材を通じて視野の広がりやキャリアに関する認識の深まりが見えており、本教材が韓国語専攻学生にとって有意義であることが感じられる。

最後に、日本の大学で留学生を対象とした日本語教育の授業における実践について、結果を見てみたい。表7、および表10の日本における日本語教育の授業実践に関して、大枠として本学が商科大学ということもあって1年次から年に6回ものキャリアガイダンスを実施していることから、3年次で既に学生達の就職への意識が高く、様々な知識を有している環境にある。このため、事前・事後調査において大きな差が生じたという結果にはならなかったものの、事後調査の結果に関しては概ねポジティブであり、学生達にとってはモチベーションの維持やさらなる向上、また既存の知識についての整理、再確認の機会となっていることが数値から窺うことができる結果となった。また、同じく事後調査の自由記述欄では、表10のeのように「日本で就職したいという気分がとて高くなったと思います」「B to Bの企業にも優良企業が多いことに気づいた」「B to BとB to Cの意味の詳しい説明があったので、理解できた」「就職について、まだ遠いと安逸に思っていました、早く自分なりのやりたいことを見つけなければならないと思うようになりました」というコメントがあった。このように、学生の就職と日本語を活かしたキャリアへの意識向上、そして業界の幅に関する知識の涵養に本教材が有意義であったといえるだろう。

以上、3大学における授業実践の結果をみたが、いずれの大学でも事前調査に比べ事後調査においてはキャリアに対する意識の向上と多様なビジネスに対する知見の広がりが見られたといえる。

5. おわりに

本稿では、専攻として日本語などを学ぶ大学生の視野を広げるための副教材または自律学習用教材として制作がなされたビデオ教材『映像で学ぶキャリア - 日韓の学生が専攻言語を生かすために-』を授業で使用した結果を提示してきた。具体的には、3名の研究者がそれぞれの授業実践の前後にアンケート調査を行い、計94名の学生の反応と変化について報告した。

また、今回の授業実践は受講生の性格が異なる複数の授業で実践を行ったといえるが、大きく三つに分けることができるだろう。一つ目は、韓国の大学で日本語を専攻する韓国人学生であり、二つ目は、日本の大学で韓国語を学ぶ日本人学生であり、3つ目は日本の大学で学ぶ外国人留学生である。このように本調査研究は、背景を異にする大学生を対象に授業実践を行っており、特長といえる。

分析の結果、三大学いずれにおいても、本教材の使用によりキャリアに対する意識の向上と多様なビジネスに対する知見の広がり確認された。このことは、今回使用したキャリア教育用ビデオ教材の内容が、一定程度、日本語や韓国語を専攻する大学生のキャリア意識を高めることに役立つことを示していると考えられる。日韓ともに、大学の外国語専攻においては、外国語能力の向上や社会文化に対する理解や実践能力の育成が行われているが、他方で学生から社会人へとステージを移行していく学生のためのキャリア教育は十分に行われているとは言い難い。そして学びの場所が韓国と日本というように違いはあっても、東アジアの両国における外国語専攻においては、キャリア支援という共通の課題があり、その解決にも協力して行っていくことができる余地があることが窺える結果であったともいえる。

大学の就職専門部署などで提供する面接対策といった技術的な対応もちろん重要であるが、専攻教育において自らの専攻の先にどのようなキャリアを展望することができるのかを知ったり考えたりするという面から、専攻教育ならではのキャリア教育が行われることが望ましい。

本稿では、このような問題意識のもとに制作されたビデオ教材を用いて授業実践を行い、その結果、学生のキャリア意識の高まりに資することが確認された。このことは、今後の外国語専攻教育におけるキャリア科目のあり方についての議論において、参考となりうる結果であると考えられる。

なお、今回の調査研究においては、大学の1回分の授業での実践である。90分間という限られた時間での1回の視聴での学生の反応を確認したものであるが、学生自身の探索活動や、外部講師の講演等と組み合わせて、全15回の一つの科目としてカリキュラムを作成していくことは、外国語を専攻におけるキャリア科目の充実に向けては課題となる。この点については、今後さらに研究を続けたい。

【関連ウェブサイト, 資料】

- 磯野英治・西郡仁朗 監修(2019)ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』, 2017年度～2019年度 科学研究費若手研究(B) 研究課題番号17K13490「言語景観を教材とした社会文化的理解を目指す内容重視型日本語教育の研究」(研究代表者:磯野英治)(https://youtu.be/qB0-eSC_yUQ)
- 西郡仁朗・磯野英治 監修(2014)ビデオ教材『東京の言語景観—現在・未来—』, 東京都アジア人材育成基金 (https://www.youtube.com/watch?v=NHV338g_NB0).
- 松崎真日・磯野英治・檢校裕朗 監修(2022) ビデオ教材『映像で学ぶキャリア—日韓の学生が専攻言語を生かすために—』, 2019～2023年度科学研究費基盤研究(C)研究課題番号19K02875「日韓の韓国語専攻・日本語専攻の学生が架け橋となるためのキャリア支援に関する研究」(研究代表者:松崎真日)(<https://www.youtube.com/watch?v=AfxzYV1C4Fs>)
- 文部科学省中央教育審議会(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」, 文部科学省中央教育審議会 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1303768.htm, 2024年6月20日閲覧)

◀ 参考文献(Reference) ▶

- 磯野英治・西郡仁朗(2017), 「ビデオ教材『東京の言語景観—現在・未来—』の公開と教育実践」, 『日本語教育』166号, 日本語教育学会, pp.108-114.
- 齊藤明美・倉持香(2019), 「日本語学習者の就職に対する意識と企業が求める人材—韓国におけるアンケート調査及びインタビューの結果を中心に—」, 『日本語教育研究』第47輯, 韓国日語教育学会, pp.107-126. DOI: 10.21808/KJJE.47.07
- 松崎真日・磯野英治・檢校裕朗(2019), 「日韓の韓国語専攻・日本語専攻学生の就職活動に関する認識」, 『韓国日語教育学会2019年度 第36回国際学術大会発表論文集』, 韓国日語教育学会, pp.109-112.
- _____(2020), 「日韓の日本語専攻・韓国語専攻学生の就職活動に関する認識—キャリア支援の基礎調査—」, 『日本語教育研究』第53輯, 韓国日語教育学会, pp.77-93. DOI: <http://dx.doi.org/10.21808/KJJE.53.05>
- _____(2021a), 「日韓の言語専攻学生のキャリア教育用ビデオ教材制作の背景と枠組み」, 『日本語教育研究』第56輯, 韓国日語教育学会, pp.183-196. DOI: <http://dx.doi.org/10.21808/KJJE.56.11>
- _____(2021b), 「ビデオ教材『映像で学ぶキャリア—日韓の学生が専攻言語を生かすために—』のシナリオと制作」, 『韓国日語教育学会韓国日語教育学会2021年度第40回国際学術大会発表論文集』, 韓国日語教育学会, pp.41-44.
- _____(2022), 「ビデオ教材『映像で学ぶキャリア—日韓の学生が専攻言語を生かすために—』の全容の報告」, 『韓国日本研究団体 第11回 国際学術大会 (韓国日本学会 創立50周年 第104回) Proceedings』, 韓国日本研究団体(韓国日本学会), pp.287-289.

(2023a), 「ビデオ教材『映像で学ぶキャリアー日韓の学生が専攻言語を生かすために一』の制作と公開」, 『日本学報』 第134輯, 韓国日本学会, pp.1-16. DOI: <https://doi.org/10.15532/kaja.2023.02.134.1>

(2023b), 「ビデオ教材『映像で学ぶキャリアー日韓の学生が専攻言語を生かすために一』のシナリオの公開」, 『日本語研究』 第43号, 首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会, pp.1-15.

<ABSTRACT>

Production and Use of Video Teaching Material for Career Support for Foreign Language Majors in Education : Practice in University Education in Korea and Japan

MATSUZAKI Mahiru (Kwansei Gakuin Univ.)

ISONO Hideharu (Nagoya Univ. of Commerce & Business)

KENKO Hiroaki (Far East Univ.)

The purpose of this study is to report on the teaching practice of Video Resource “Careers through Video: Japanese and Korean Students Making the Most of Their Major Languages”, an educational video material specialized in career support for Korean-Japanese language majors, and to explore the feasibility of implementing career education in foreign language major education. Korea and Japan have a long history of cultural and political exchanges. Currently, there are many students studying Japanese or Japanese culture in Korea and Korean or Korean culture in Japan. However, there is no systematic career support for these students after graduation. As a result, these students are in a situation where they have to determine their own career paths. In response to these issues, Matsuzaki, Isono, and Kenko (2019, 2020, 2021a, b, 2022, 2023a, b) have conducted a survey about providing professional education career support to undergraduates, as well as producing and releasing educational video materials.

In this article, we discuss the classroom implementation of these video materials. Three researchers used the video teaching materials for career education at three different schools for students majoring in Japanese or Korean. Surveys were conducted before and after the implementation of the video teaching materials. Analysis of the results indicated that students' career awareness improved in all classes. This result suggests the possibility of implementing career support education for students majoring in foreign languages in conjunction with their education major.

Keywords : career support, video materials, classroom practice, reaction before and after taking the course

■ 투 고 : 2024. 06. 30.

■ 심 사 : 2024. 07. 15.

■ 심사완료 : 2024. 08. 01.